

《書評》

『中国語現代文学案内：中国、台湾、香港ほか』

栗山千香子*・上原かおり**編、三須祐介***ほか著、ひつじ書房、2024 年

阿 部 沙 織†

本書はその名のとおりに、「中国語」で書かれた「現代」の「文学」を「案内」する書物、^{ガイドブック}「案内書」である。書名から一目瞭然のことを、上のように敢えて括弧つきでもう一度繰り返したのには、わけがある。本書を通読すると、これらの語に包摂されているようで、そこに収まりきらない「中国語圏」の文学的営為の豊饒さ、複雑さが立ちあらわれてくるからである。本書がカバーするおおむね 1970 年前後から出版時点の現在という時間軸「現代」の大きな時代変動の中で、文学者たちが「中国語」とはなにか、「文学」とはなにかと格闘した跡がそこには滲んでいる。

本書の構成を「はじめに」(iii 頁)から引用すると、以下の 5 つの部分から成っている。

- (1) 中国現代文学／台湾現代文学概観（1970 年代末から現在までの中国と台湾の文学を概説）
- (2) 作家ファイル（99 人の代表的な中国語作家の解説と、代表作の一節の翻訳紹介）
- (3) コラム（香港文学、映画、演劇、詩に関する論説）
- (4) 邦訳作品リスト（作家ファイル収録の 99 人の作家の日本語翻訳作品のリスト）
- (5) 人名索引（概観、作家ファイル、コラムで紹介した作家・映画監督等の索引）

うち (2) 作家ファイルは見開き 2 頁で一人の作家を「略歴」と、作品や作風、文学史上の位置づけなどについての「解説」、そして代表作の一部の「翻訳」の 3 項から紹介しており、本書の核心を成す部分となっている。編者の栗山千香子氏はこの作家ファイルを「99 の点」とし、(1)「概観」がこれらの「点の位置」、「作家ファイルに未収録の作家も含めた点と点のつながり」を示してくれることを述べている。「概観」は個々の作家と作品が置かれた地域と時代の見取り図となっているし、(3)「コラム」のうち、台湾映画についてのコラム②と中国映画についてのコラム④はこれらの点とつながる映画やドラマをやはり地域と時代にマッピングしてくれる。またコラム①は伝統演劇、コラム③は香港文学、コラム⑤は現代女性詩を取りあげ、「作家ファイル」においては相対的に登場の少ないジャンルを補い、理解を深める役割を果たしている。(4) 邦訳作品リストには

* 中央大学法学部教授

** フェリス女学院大学国際交流学部准教授

*** 立命館大学文学部教授

† 拓殖大学外国語学部准教授

s-abe@ner.takushoku-u.ac.jp

99作家の邦訳作品が網羅的にまとめられており、(5) 人名索引には作家ファイルに挙がっていないが本書で言及された作家も記載され、中国語現代文学の大海原に漕ぎ出す者にとって、行き届いたガイドブックとなっている。

特に(1)「概観」はコンパクトながら、中国は1970年代から、台湾は1950年代からの文学潮流をわかりやすく伝えており、中国語現代文学に興味を持った読者にとっては好適であろう。「中国文学概観」（本書で紹介される中国本土出身作家は59名）は70年代から90年代の部と、90年代以降の部の2部立てとなっている。上原かおり氏による後者ではネット文学の隆盛やSFなどのジャンル小説の発展について述べられており、最新の文学状況、たとえば世界を席卷する中国SFの源流を知る助けとなる。また、三木直大氏による「台湾文学概観」（本書「作家ファイル」で紹介される台湾出身作家は33名）は多元的な台湾の文学状況を丁寧な解説しつつ、最後に日本語で創作する温又柔、東山彰良、李琴峰も「台湾文学」の系譜の中に一席を占めることを示唆しており重要である。

評者は当初、50音順に作家が並ぶ構成からも「事典」に相対する気持ちで本書をひもといた。実際、「はじめに」にも「ミニ文学事典」としての役割も想定していることが述べられている。しかしながら、実際に頁をめくると、そこに広がるのは、その作者と作品を熟知し、多くの場合翻訳者でもある31名の解説者による作家・作品評であり、事典というよりはむしろ「書評集」の感触を得た。各作家ファイルを邦訳作品リストと照らし合わせて見ていくと、日本における中国語現代文学の研究史、翻訳史もまた浮かび上がってくるだろう。邦訳点数ではノーベル文学賞を受賞した莫言が137点と最も多いが、残雪も100点を超えている。リスト全体の厚み、訳者の仕事の総量に驚かされると同時に、このように詳細なリストが供されることの公益性の高さを思う。

評者は頁を順に追って同書を読み進めた。「事典」としての性格も持つ同書をこのように読むことはあまり一般的ではないかもしれないし、むしろパラパラとめくって目に入った作家の作品を読んでみるというような向き合い方が楽しいガイドブックともいえる。だが、頁をめくるとくると全く異なる作家が立ちあらわれ、その世界と向き合う読書体験の中で、日本語の音読みによる50音順という並びによって、地域や時代の枠の中で語られがちだった作家を、いわばシャッフルしてしまっているところに本書の妙味があることに途中から気づく。そしてそれはもしかしたら、日本という場所で中国語圏文学に相対することによって、当地の既存の枠組みを離れた読みが可能になることを図らずも示唆しているのかもしれないし、逆に日本や日本語の枠から自由になれないことを示しているのかもしれない。

かっちりとした形式の作家ファイルの中に挟みこまれるコラムは、前頁の作家ファイルの事項と関連する形で配置されており、ほかの複数の点をもゆるやかにつなぎうるハブとして浮かび上がってくる。読者も同様に、99作家の点を地域、時代、作風、ジャンル、あるいは単に好みによって、自由につないでいけばいいのだと示しているかのようだ。またこのコラムは「はじめに」で「エッセイ」と紹介されるように、作家ファイルと比すると著者の顔が見え、また作品と向き合う歓びが流露している。

松浦恆雄氏によるコラム①「役者の声は人生の精髓」は、留学時代に伝統演劇と出会った著者が舞台上、ラジオを通して、貪るようにその世界を探求していく過程が生き生きと再現されている。著者がその時の情動を「背筋が震える」「涙が止まらなかった」と身体性をもって伝えているところに、多くの読者は共感するのではないか。少なくとも、評者は（程度の差はあれ）そのような強

いおののきを経て、中国語の文芸世界をもっと知りたいと思った原体験を顧みさせられた。

佐藤普美子氏によるコラム⑤「散文のことばから詩のことばへ」は、陳敬容（中国）、西西（香港）、零雨（台湾）、3名の女性詩人が「落ちる」「回る」「通り抜ける」という日常的な動詞に「新しい生命を吹き込んだ」ことを詩の豊かなイメージとともに解説する。同時に、それは女性詩人が「身動きがとれない」状況にあることの裏返しではないかとの問いかけにははっとさせられる。本書「作家ファイル」で詩人は14名取り上げられているが、限られた「翻訳」スペースの中で、詩の言葉はその強みを発揮しているように見える。本コラムはそれらの詩を微細に読むことで、あるいは日常の景色が変わり、あるいは言葉を介して異なる場所で書き手と読み手が共振する詩の世界を伝えている。

河本美紀氏によるコラム③「香港文学が描く集合的記憶」は、2016年のアンソロジー《年代小説・記住香港》を概観するかたちで、1970年代以降にその名があらわれたという「香港文学」（本書「作家ファイル」で紹介される香港出身作家は5名）の歴史を、香港のローカル性とアイデンティティの視点から読み解く。広東語やローカル文化の継承が危惧されている現状への指摘は、香港ポップカルチャーの薫陶を受けた評者も共感するところである。

好並晶氏、三木直大氏による中国・台湾映画案内コラムには多くの作品が並ぶ。映像コンテンツのサブスクリプションが発達したことで、これらの作品へのアクセスが容易になったことから、紹介された作品に手を伸ばしやすい。このことは同時に、邦訳作品リストに挙がる数多の作品も同様に多くがオンラインで読むことが可能になれば、との思いを抱かせる。そのように考えるのも、本書に、そして本書を入口として日本語に翻訳された中国語現代文学の大海に、より多くの読者が出会ってほしいと願うからである。

99名の作家ファイルの多くからは、過酷な現実や被抑圧的状况、さまざまな制限と向き合いながら言葉を紡ぐ創作のあり方が浮かび上がった。また、本書の背後には、それら作品と真摯に対話を重ね、日本語の世界に紹介した翻訳者たちの存在がある。ひとりひとりに深く敬意を表しつつ、読者のひとりとしてこのガイドブックを片手に中国語現代文学の沃野にわけいたいと強く思う。